

第五表 評価段階とピアノを習っている者の関係

人数		評価段階	
		人	人
最優 優上 中中 中下	優	1	1
	優	9	4
	中	51	2
	中	36	なし
	下	4	なし

ふだん非常に消極的で、リズム遊戯は殆んど行わず音楽に対する反応が極めて低い幼児が、音楽検査得点42、評価段階中上と出るのもあった。つまり、音楽の演出力にも、幼児の外向的或は内向的な性格が大いに関連するといえるわけである。それで日常生活に於ては内向性を示すものでも、特に興味

を持つ事には外向的な状態を表現する事もあり得るので、これらの幼児の指導点が明らかにされたわけでもある。環境調査中、楽器や歌を習った事がある者と素質検査の得点が一番関連がある様に思われる。その関係をみつけたのである。第五表の如く、素質に恵まれた幼児の才能は適当な指導によって伸びると云う万能性を示していると思

う。  
以上の様に、本テスト施行の結果は、私共保育者と幼児に対する音楽指導について幾つかの解答を与えてくれた。今後とも適時本テストを施行することにより、幼児の素質を正しく把握し、誘導方向を誤りなく捉えてゆきたいと思つう。

幼児に於ける田中教育研究所編

「音楽素質診断テストについて(その一)」

—主として音楽環境及びWISC結果との比較—

姫路工業大学

守屋光雄

釘宮 牙子

高橋 洋子

〔研究の主旨〕

今回は、田中教育研究所編「音楽素質診断テスト」を用いて、まづクラス(A)としてピアノヴァイオリンなどを習っている者。次にクラス(B)として習っていないが、教師その他によって優れているとみなされる者。更に(C)クラスは、習っていないが、劣っているとみなされる者。例えば音痴とよばれている者や、本人自身が音楽的興味を示さないし教師の評価も低い者の三段階に対象を選び、その年齢層を5才から6才の幼稚園児に限り、本テスト施行上の限界を知ると共に、これにWISC知能診断テストを併用し両者の相関を求めた。即ちこれら三段階の対象群がそれぞれ実際上の問題としての教師その他の評価点と如何なる関係を有しているのか、更に知能もしくわ性格的な因子とどのようにからみあっているのかを探ってみようとしたものである。但し今回は、被験児が少数であり信頼性に乏しい嫌があると思われるが、第一回実験として予備調査的なものとしたい。

〔対象〕

兵庫県姫路市立城北幼稚園、日の本幼稚園、網子マリア幼稚園の園児で、この中男児8名女児10名を選び、年齢は5才から6才に限

A ピアノヴァイオリンを習っている クラス				B 習っていないけれどすぐれ ているとみられるクラス				C 習っていないで劣っているとみ られるクラス			
	音楽 テスト 粗点	WISC IQ	相関係数	音楽 テスト 粗点	WISC IQ	相関係数	音楽 テスト 粗点	WISC IQ	相関係数		
WISC 全検査	1	39	105	1	35	133	1	14	93		
	2	40	102	2	36	108	2	24	80		
	3	40	119	3	37	102	3	34	99		
	4	40	115	4	36	99	4	26	109		
	5	41	103	5	36	116	5	30	91		
	6	29	98	6	27	93	6				
	7	39	105	7			7				
WISC 言語学検査	1	39	99	1	35	115	1	14	89		
	2	40	100	2	36	121	2	24	73		
	3	40	117	3	37	100	3	34	99		
	4	40	113	4	36	102	4	26	117		
	5	41	102	5	36	118	5	30	101		
	6	29	102	6	27	91	6				
	7	39	99	7			7				
WISC 動物性検査	1	39	110	1	35	141	1	14	97		
	2	40	104	2	36	93	2	24	93		
	3	40	116	3	37	104	3	34	86		
	4	40	113	4	36	94	4	26	98		
	5	41	102	5	36	109	5	30	82		
	6	29	93	6	27	97	6				
	7	39	110	7			7				

定した。

〔方法〕

最初、音楽テストを2乃至3名のグループに分けて前後二回に行い（この年齢層に於けるインストラクションの理解はやや困難におもわれる。即ちテスト・シテイエイションに入り難いものが屢々生じている。特に問題一の高低は強弱などと混同され易く理解し難いようである）

〔結果の整理と考察〕

クラス(A)に於ける音楽テストは、被験児全体に平均して上位の評価点を有していることはクラス(B)(C)に比較して高位である点、ピアノなどを習っているという環境的な影響であるか、又は被験児自体の素質的な優位性が作用するものであるか、両者の相互作用の結果であるとも考えられるのではなからうか。更に全体を通じて問題6の「鑑賞・表現」が上位のプロフィールを描いている点(B)(C)には認められない。

次にクラス(A)の音楽テストがWISC全検査IQとの示す相関は、表1の如く0.621となり、知能との関係が予想される。又言語性IQとは0.202で有意性は認められないが、動作性IQに於いては0.713となり比較的高い相関を示している。このことは問題4の「リズム因子」が(A)に於いては中から上位へ移行する傾向が多く、又この年齢層のレディネスも考えられることから両者の関係に何等かの意味がもたらされることがおもわれる。因みに、前田(立命大)の施行した中学生300名のシーショア音楽テストに於いてもリズム因子は最も影響が大で更に音楽素質診断テストに於ける同じく中学生300名の因子分析の結果

リズムが第一因子に予想されたと報告されている。但し、WISC 動作性の下位検査問題の性質として必しもリズム其の他の運動感覚を純粹にとり出していない点、例えば体力テストなどで個々の運動感覚との相関をみる方がより適切なのではあるまいか。

次にクラス(B)に於いてはまづクラス(A)より全体として評価点が劣るがWISCに於ける全検査QはクラスAのそれに劣っていないし逆に優れたケースも認められる。例えばM・T(○)は動作性Iが最も高いにもかかわらず音楽テストは中位である点などは注目される。なおクラス(B)に於けるWIのC全検査Qとの相関は<sup>0.574</sup>言語性Qとは<sup>0.981</sup>で極めて高く、反対に動作性Iとは、<sup>0.172</sup>で、この現象はクラス(A)と逆である。

第三に、クラス(C)では両テスト共に(A)(B)より低いことが目立つ。即ち音楽テストは、中より下位への移行が目立ち(A)(B)に比較して問題6の「鑑賞・表現」が劣っている。又、WISC全検査Iとの相関は<sup>0.212</sup>言語性Qとは<sup>0.355</sup>動作性Qとは<sup>0.336</sup>となっており(B)(C)に比較して極めて低く更に逆相関を示している点などについては、両テスト共に低い評価点を検出しているにも拘らず、相関係数算出に於ける数的処理の問題及び対象人員の不足などと共に対象群の選出などに再検討を加える必要があるものと思われる。

以上の点に加えて次回は、各サブテスト間の相関、因子分析などを行いこのテストの限界を求めてゆきたいと思う。

## 幼児用絵画統覚検査(R. C. A. T.) 作成の試みについて

芦屋市児童教育研究所 山本眞市

頌栄短期大学 西本脩

西宮市上甲子園小学校 吉井忠生

### 目的

幼児の保育に直接あたっていられる先生方は、いろいろ問題の子供に出会われることと思う。そのとき何とかしてよい子に導いてやろうと思われても、ただ愛情だけではどうにもならない。その原因や問題点を或程度客観的につかみたいと思われるでしょう。このような目的に達するように考案されたものがこのテストである。即ち幼児に絵を見せてその絵を見ながらお話をつくらせる、そしてそのお話を分析してその子供のもっている欲求や圧力を知らうとするものである。

この種のテストとして Bellak の R. C. A. T. もあるのであるが本邦児童の生活習慣に適合しないために場面として不適なものがある。そこで本邦児童に最も親近性のある兎の漫画を材料として場面を構成した R. C. A. T. (Rabbit Children's Apperception Test) の作成を試みたのである。

手続 (A) テスト作成上の留意点